



## あべ俊子文部科学副大臣 鳴門教育大学を視察

2024（令和6）年1月17日（水）、あべ俊子文部科学副大臣が、鳴門教育大学を視察に来られました。

あべ副大臣は、佐古秀一学長から本学が中心となって取り組む広域分散型の四国地域国立大学連携教職課程、自己伸長型の教員養成への転換を図るセルフデザイン型学修の開発実装、教職大学院における多様な背景を持つ教員の養成等の特色について説明を受けた後、教員採用試験の早期化や教員採用試験の共通化、教職大学院の在学年限の短縮、現職教員の学び直し（リスキリング）の重要性や科学的根拠に基づく教育（エビデンス・ベースド・エデュケーション）などについて、多岐にわたって意見交換を行いました。

次に、あべ副大臣は、教職大学院の授業「1人1台



大学院生と意見交換するあべ副大臣



授業見学で藤村教授から説明を受けるあべ副大臣と佐古学長

タブレット時代の授業改善・教育改善」（授業担当：藤村裕一教授）を見学。大学院生が授業で使用している教材を使って、授業を体験しました。

最後に、教職大学院の小坂浩嗣専攻長（教職系）の司会進行のもと、教職大学院の院生3名と、教職大学院での学び、大学院進学に当たっての支援内容、教職大学院生による学校現場支援の取組、学校現場の現状などについて意見交換を行いました。意見交換の場では、あべ副大臣は院生からの質問にも丁寧に答えられ、院生にとっても貴重な機会となりました。

なお、視察には、文部科学省から小倉基靖教員養成企画室長、森次郎高等教育局教育課企画官、中村陽介副大臣秘書が同行しました。

学長 × 鳴教大学院軟式野球チーム 対談



2023 (令和5) 年7月25日 (火), 佐古学長と鳴教大学院軟式野球チームのメンバーが対談を行いました。

(左から田中敦士さん, 佐古学長, 高下貴生さん, 北尾陸人さん)

《学長》鳴門教育大学大学院の長期履修学生のチームが鳴門市の軟式野球大会で優勝したということを伺いました。大学で様々な授業を履修しながら苦勞されているにもかかわらず、野球でも頑張っておられるということで、是非お会いしたいと思い、このような場を設けました。まず、お一人ずつ自己紹介を簡単にお願ひできますか。

《田中》キャプテンを務めております田中敦士と申します。学年はPL 3年 (長期履修3年) で、校種の方は小学校の免許取得を考えております。所属は、保健体育科教育コースです。

《高下》高下貴生と申します。年齢は29歳で、コースは同じく保健体育科教育コースで、PL 3年です。

《北尾》北尾陸人と申します。PL 2年生で24歳になります。保健体育科教育コースです。

《学長》皆さん、保健体育科教育コースなのですね。皆さんがこの大学で勉強しながら野球の活動をされているということなのですが、そもそも皆さんが、鳴教大の教職大学院を選ばれた理由は何ですか？

《高下》私は元々教員になりたいという気持ちはありましたが、大学時代に教員免許を取っていませんでした。しかしコロナ禍となり、仕事の休みが多くなりました。その時にもう一度教員になりたいと思うようになり、色々調べると、鳴門教育大学の大学院だったら、3年間でゼロから教員免許が取れるということを知って、やるなら今しかないと思い仕事を辞めて、鳴門教育大学の大学院を受験しました。

《学長》そうですね。この新聞記事等によると、プロの野球選手をやっておられたんですよね？

《高下》そうです、愛媛の独立リーグで。

《学長》それを辞めて鳴門に来られたということですか？

《高下》その後、プロ野球の球団でバッティングピッチャーとして2年間仕事をして、そこからこちらに来ました。独立リーグの時、教員になりたいと思いつつ、教員免許を持ってなかったので諦めたのですが、学校教員養成プログラムで教師になろうと一念発起して、鳴教大に入学させてもらいました。

《学長》どうですか、鳴教大に入ってみて。予想と違っていましたか？

《高下》いや、そんなことはないです。実習が多くあると聞いていたので、今はしっかり実習もしながら。教採の時期なので、しっかり教採のためのガイダンスなども受けたりしながら、やらせてもらっています。

《学長》なるほどね、ありがとうございます。非常に意欲的に自分の進路を真剣に考えて、教員になろうということで鳴教大を選んでいただいたというのは、私は非常に嬉しく思っていますし、ぜひその夢を叶えていただきたいと思っています。では、先生になったら、どんな人になりたいですか？

《田中》僕は、やはり誰からも信頼される教員になりたいと考えております。

《学長》そういう人になるためには何が必要だと思いますか？

《田中》普段からの発言であったり行動というのは、僕の中でいつも意識していることであって、やはり子どもたちの前で喋るにしても、普段の自分の生活態度であったり発言の仕方といったものが、子どもたちから信頼を得られていないと、自分が発言したことに対して子どもたちも、「この先生の言うこと、聞く気にならない」という風になったりすると思うんです。同僚や先輩教員も、普段から信頼されていないと、助けてあげようとか教えてあげようという風にならないと思うので、自分の中で一番意識していることは普段から信頼される発言であつたり

たり、行動をとるようにしています。

《学長》なるほど。北尾さんは、いかがですか？

《北尾》自分自身そうなのですが、「あの先生に、あの指導者の方に教えてもらった」ことが今、活着しているという部分がすごく多くて。実際、鳴門高校の野球部を指導させていただく機会があるのですが、コミュニケーションの取りやすい先生って、年齢に近いこともあるのですが、それ以外でも「この先生なら、こういう悩みが言える」とか、良い意味である程度の距離感は保ちながらも、生徒がどんなことでも「あの先生にだったら相談してみようかな」と、まずは向こうから話しかけてもらえるような信頼される先生になりたいと思っています。それを目指す上でも、やはり今の鳴門教育大学の3年間、まだ2年目ですけど、これから始まる教育実習で、そういう子どもとの接し方、どうしたら生徒の信頼を得られるのかというのを、これから学びたいと思っています。

《学長》そうですね、ありがとうございます。皆さん、本当にしっかりしていますよね。先生になるということだけじゃなくて、やはり自分のなりたい先生像がある。そして、先生にとって何が大事かということとしっかりと考えて道を進んでおられるので、非常に感心しました。ありがとうございました。あと、鳴教の良さって何かあ

りますか？

《高下》僕は、社会人を経験している所以他の学生と比べて年齢が高めなのですが、そんな僕でもこうやって若い人達と話をしたり、学部生とも仲良くなれたりするので、そこは鳴教の魅力だなと思います。

《田中》僕は現職の先生と一緒に授業を受けられるというところが、すごく自分のためになる制度だと思っていて、授業で現職の先生とグループワークで討論する際などにリアルな現場の声が聞けるので、すごく勉強になります。

《学長》そうですね。今日は本当に皆さん、しっかりと考え方を聞かせてもらって、学長として頼もしい限りです。ぜひ教師になって、子どもたちを導くようになっていただきたい。鳴教で育った先生として大いに活躍されることを期待しています。色々苦勞も多いと思いますけれども、乗り越えられると思いますので、よろしくお願いします。本日はありがとうございました。

《一同》ありがとうございました。

-----

対談の全編は、鳴門教育大学公式ウェブページ内「大学案内」⇒「学長だより」⇒「学長トピックス」で公開中。

## 連携協定を締結しました

本学は、包括的な連携のもと、教育研究等の分野において相互に協力し、その向上に寄与することを目的とした連携協力に関する協定を次の大学と締結しました。

2023 (令和5) 年6月15日 (木) 高知県公立大学法人高知工科大学

2023 (令和5) 年12月22日 (金) 追手門学院大学

2024 (令和6) 年1月15日 (月) 高知県公立大学法人高知県立大学

これらの協定締結により、本学は国内の19大学と包括的な大学間連携協定を結びました。今後、教育課程の充実や学生・教職員の交流など様々な分野での連携協力を推進し、教員養成分野における教育・研究の向上を目指して参ります。



佐古学長と蝶野高知工科大学長

佐古学長と真銅追手門学院大学長

佐古学長と甲田高知県立大学長

## 留学生とともに、いじめについて考える授業

2023 (令和5) 年6月15日 (木)、各国でも課題となっている、学校でのいじめへの対応について考える授業が行われました。授業には、日本人学生のほか、アフリカなどからの教職経験のある留学生など、約40人が参加しました。学生たちは、日本人学生と留学生を交えた少人数のグループに分かれ、それぞれ多様な意見が交わされました。授業後、日本人の学生からは「海外では、子どもたちが話し合って自分たちでルールを作り、解決することもあるという話が興味深かった」「それぞれが培ってきた文化の違いから、様々な考えを伺うことができ、とても有益だった」との感想が述べられました。





## 鳴門教育大学における養成教育の改革



鳴門教育大学では、「教員養成改革への挑戦」をキャッチフレーズに、主体的に学ぶ力を持ち、多様な子どもや複雑な課題に対応して教育実践を創り出せる教師＝「主体的に学び創造的に実践する教師」の育成に取り組んでいます。教員を目指す学生は、教師としての自己の現状と特長に向き合い、さらに教師としての自己を伸長させていくために、学修課題を主体的に構成し学ぶこととしています。そのために、令和5年度から新たに、初年次教育科目「鳴教大生学びの第一歩：学びのセルフデザイン」「鳴教大生学びの第一歩：自己・他者・地域・世界の課題解決」を開講しました。

### ★「鳴教大生学びの第一歩：学びのセルフデザイン」

「学びのセルフデザイン」では、体験的な活動を通して、学生が自分で自分の学びを切り拓いていくための手法を身につけます。模擬授業を行ってみて、その体験を基に、どのような授業が良いと思うかを対話で深めたり、ワークショップを通して創造的に協働する手法を学びます。また、全学的なDX計画の中で、AIによる支援機能を持ち、教師としての主体的な学びを支援するeポートフォリオシステムを開発、それを活用して実践→省察→次の課題の設定→実践…と、学生が自ら課題を設定し、その解決に向けて主体的に学んでいけるような授業を構築しました。

### ★「鳴教大生学びの第一歩：自己・他者・地域・世界の課題解決」

「自己・他者・地域・世界の課題解決」では、学生にテーマに即した場所実際に赴き、主体的に学び、創造的に実践する応用力を身につけた教師の育成を目指します。



## NHK記者が防災授業



2023(令和5)年6月21日(水)、NHKで災害や防災などを担当している記者が、自身の取材経験をもとに、学校現場における「防災」をテーマとした講義を行い学部1年生約100人が参加しました。

講義では、東日本大震災で宮城県石巻市にある大川小学校の児童と教職員あわせて84人が犠牲となり、学校や行政の安全対策が問題となったことが取り上げられました。その上で、当時の教訓をもとに徳島県阿南市の小学校が校長など管理職の不在時を想定した避難訓練を行っている事例などを紹介し、災害時には現場の教員の判断が子どもたちの命を救うことにつながると、防災教育の重要性を訴えました。



グループ討議でのディスカッション



## 大塚国際美術館での体験型授業



2023(令和5)年7月15日(土)、学部1年生約100人が大塚国際美術館でフィールドワークを行いました。

この授業は、セルフデザイン型学修の一環として地域の文化財をソースとした学修を通して、文化を愛する心を涵養すると同時に、地域や他者との共生・協働を前進させるための創造的な課題解決能力を身につけることを目的に実施しました。

学生らは展示された作品の魅力や価値にふれながら、美術館を運営するにあたり気づいた課題をチームごとにまとめ、ユニバーサルデザインに関する気づきやSNSでの発信方法などについて、それぞれ意見を発表しました。

大塚国際美術館の担当者からは「今後教師を目指す皆さまならではの気づきから生まれた貴重な共感点、改善点は参考としたい。」との感想をいただきました。



大塚国際美術館での授業の様子

